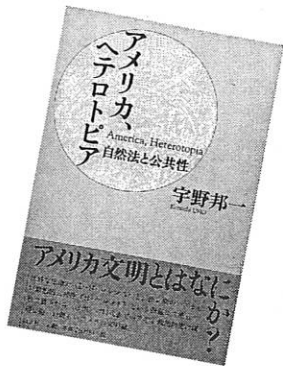


▼宇野邦一著『アメリカ、ヘテロトピア』自然法と公共性 121頁、四六判、二二〇〇円、以文社

# 「ヘテロトピア」としてのアメリカ

現実のアメリカを批判的に映し出す鏡としての役割

上村忠男



宇野邦一は、『アルトール・ユングと身体』『ジャン・ジュネー―身振りと内在平面』『ドゥルース―群れと結晶』など、主として現代フランスの作家や思想家について論じた著作で知られる。その宇野が、ここ数年來、アメリカにこのほか熱

い関心を寄せてきた。本書はその宇野のアメリカ論を集成したものである。ネグリ／ハートの『権力』につづいての所感をはじめとして、示唆に富む大小あわせて十本の論考からなる。しかし、なによりもわたしの目を惹いたのは、宇野がみ

ずから関心を寄せた「アメリカ」を指して「ヘテロトピア」と称していることである。著者はシエル・フーコーが一九六七年四月にジュネーヴの建築研究所で行った講演「異なる空間について」のなかで述べているところから、わたしたちがその内部で生活し文化を形成している空間のなかには、「ヘテロトピア」とも称すべき特別の機能と意義を担った場所があるという。それはユーロトピアのように非在の場所ではなく、実在の場所である。実在の場所でありながら、ひとりの文化の内部に見いだすことのできる他のすべての場所を表象すると同時にそれら

に異議申し立てをおこない、ときには転倒もしてしまうような異質な空間―それが「ヘテロトピア」である。自分が関心を寄せた「アメリカ」は「ヘテロトピア」と称しているものである。一見したが、きくでは、なにも奇抜で意表をつく受けとめ方である。が、少しばかり立ちのいて見ると、宇野の「アメリカ」論を総括するにすぎない、むしろ「ヘテロトピア」のなかで新しい「ヘテロトピア」の創設に取

り組んでいるのを確認した。独自のアメリカである。あるいはD・H・ロレンスが『アメリカ古典文学研究』においてとりわけメルヴィルの作品「世界に描かれているのを見いだした法外な生命」をそれらに対峙する「反生命」とのすまじい葛藤である。

宇野は、アルントが独立期アメリカにおいて創設された「政治的公共性」のうちは古代ギリシア以来の自然法の伝統が脈打っていたと述べている。その根底には、メルヴィルが「死から生をもたずして述べたようなもろひの自然法があった」と言及している。この「根源」の自然法の典型的な事例をフョーナーの作品『アプ

サロム、アプサロム』の舞台となっていた「ユネバート」の世界のなかから見ると、それらはいずれも、理想のアメリカのうちはははちとこにも存在しないかみえ。しかしながらどうだろう。宇野も指摘するところ、それはどこにも存在しない「ユーロトピア」のまなもではないのではないだろうか。今日でもなお、現実のアメリカにたどり着いて、「ヘテロトピア」として存在するものはないだろうか。ひいては、それは現実のアメリカを批判的に映し出す鏡としての役割を担うことができるのではないだろうか。あるいは、これまで宇野がドゥルースを援用しているから巧みに言表している

ように、《歴史的現実としてのアメリカに接しながらも、決してそれに一致するものではなく、接続して現実から遠ざかる異様な線分をもつもの》なのではないだろうか。ちなみに、フーコー自身も一九六七年の講演のなかで《いくつの場合には、ならぬ植民地が、地上の空間の全般的組織の一面から見たとき、ヘテロトピアの役割を演じてきた》と述べており、例として、《十七世紀に最初の植民の波が生じたとき、イギリス人がアメリカに創設した「ユネバート」たちの社会》を挙げていた。しかし、宇野のいう「ヘテロトピア」としてのアメリカの視野はフョーナーのそれよりもはるかに

遠方にまで及んでいる。測している。しかし、ユネバートといふべきか異にするもの、ヘテロトピア」という言葉自体は前年の一九六六年に公刊された『言葉と物』の序論にもすでに姿を見せている。

(思想史家)

「図書新聞」

2013. 7/16 (土)